全さんま棒受網地域漁業復興プロジェクト（宮城地区部会・大型）

事業実施者：全国さんま棒受網漁業協同組合　　使用船舶名：第二源榮丸（199トン）
支 援 期 間 ：平成28年8月20日～令和元年8月19日　　（さんま棒受網漁業）

（取組の内容）

● 省エネ・省コスト化：
　同一船型船の建造による建造コストの削減並びに省エネ船型、大口径固定ピッチプロペラ、低燃費型機関及びLED漁灯の採用等による燃油使用量の削減を図る。

●漁船の安全性・労働環境の向上：
　二重バラストタンクの設置等による船体復元性の改善、省力機器の導入等により、労働環境及び乗組員の労働意欲の向上を図る。

●公海さんま操業への展開：
　国際的な資源管理の下、本漁期（8～12月）前の5～7月に公海さんま操業（ロシア加工母船への洋上売魚及び単独操業）を実施し、国内供給量を増加させ、公海での漁獲実績の積み上げを図る。

●漁獲物の付加価値向上・高度衛生化：
　船上箱詰とブロック凍結品の生産及び高度衛生管理により、流通段階における付加価値向上及び衛生管理を図る。

新船導入　第二源榮丸

ブロック凍結品生産

洋上売魚風景（ロシア加工母船フセブォロド・シビルツェフ32,096トン）
下 写真提供：国立研究開発法人 水産研究・教育機構

（事業の成果）

●同一船型船の建造、被代船からの漁労機器等の移設により建造コストが大幅に削減（4千万円以上）された。

●漁場が遠方に形成されたこと、魚影が薄く探索時間が長くかかったこと等により、燃油使用量が、1年目510kℓ（従来比3．3%削減）、2年目534kℓ（1．4%増加）、3年目（公海さんま操業を含む）812kℓ（2．8%削減）となった。

●主機関の低重化を実施したことにより、大幅な低重心となり復元性が改善され、安全性が向上した。

●省力機械の増設（サイドローラー・ミニボールローラー）により、操業時の網揚作業の軽労化が進捗した。

●本漁期の水揚量（3年平均）は、1，456トンで計画（2，560トン）の57%であったが、魚価が上昇したため水揚金額（3年平均）は、318百万円と計画（340百万円）の94%となった。

　3年目に計画変更して新たに実施した公海操業は、漁場が極端に遠方に形成され、魚影も薄かったため、水揚量は、279 トン（計画661トンの42．2%）、水揚金額は、19百万円（計画61百万円の31．1%）であった。

●船上箱詰（3年平均）は、魚体サイズが小さくニーズと合致しなかったため実績79箱で計画（500箱）の15．8%となった。また、ブロック凍結品（3年平均）は、魚価が安く採算が合わなかったため生産を控えた結果実績254箱で計画（1，500箱）の16．9%となった。

　3年目の公海操業では、計画にはなかったが、漁場からの距離が遠かったため、船上箱詰385箱、ブロック凍結290箱を実施した。

●海水滅菌装置を導入したことにより、さんまの鮮度保持が向上するとともに、新しい市場の整備により高度な衛生管理が確立され、安心安全で高品質な漁獲物の供給ができた。